



恋人父娘

おとこ

とっておきの青春

井沢 満(いざわ・まん)

昭和20年、京城に生まれる。

早稲田大学仏文科中退。

昭和46年、劇作ラジオドラマ脚本募集に佳作入選し、

以後、シナリオ・ライターの道を歩む。

主な作品に「みちしるべ」(プラハ国際テレビ祭金賞)、

「話すことはない」(芸術祭優秀賞)、

「うさぎ、はねた!」(民間放送連盟賞)、

「しあわせの国〜青い鳥ばたばた?」(テレビ大賞優秀賞)、

朝の連続テレビ小説「いちばん太鼓」、

ドラマ人間模様「家族あわせ」、

「夜明け前」など。

とらておきの青春
恋人父娘

定価—1,300円

昭和62年11月20日 第1刷発行

井沢 満——著者

日本放送出版協会——発行

東京都渋谷区宇田川町41-1(〒150)

電話03-464-7311

振替 東京1-49701

図書印刷——印刷

石津製本所——製本

〈検印廃止〉

©1987 Mann Izawa Printed in Japan

ISBN4-14-005133-7 C0093 ¥1300E

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

恋人父娘とておまの青春

..... 目次

七億円の花嫁!? 5

ハードボイルドだぞ 31

こわくて面白い 55

コケコッコ! 79

ロマンチックがしてみたい 103

ゆらり小船で……………127

二度目のプロポーズ……………151

恋と相続税……………175

見つけた!……………199

はらはらウエディング……………223

おまけ……………248

装幀：菊地信義

装画：後藤えみ子

七億円の
花嫁!?



恋人父娘：

人は結婚という一大事をどうやって決めるんだろう。

あたしの場合は——と郷子は思った。こりやもう突発事故としか言いようがないのではないかしら。たぶん父、雄平にとっても。

郷子は雄平と腕を組んで『芙蓉会館』の門をくぐった。結婚式場だ。

父娘で腕を組むのは習慣で、本人たちは意識していない。これが誤解の種になったのだけ。

式場予約コーナーの手前で、雄平がしぶったように足を止めた。

「おい、郷子……」

郷子は組んでいた腕を離して雄平をにらんだ。

「後悔してるの？でも今さらヤメたなんて言わせないんだから！」

予約カウンターの受付の女性が、そ知らぬふうで聞き耳を立てている。

郷子は雄平を引っ張らんばかりの勢いでカウンターの前に立った。

「私たち、結婚するんですけど！」

妙に決然とした言い方になったのは、緊張のせいだ。

「まあ、おめでとうございます。日本ふうの美人でらっしゃるから、角隠しがお似合いですわよ」

角隠し!? のっけにお愛想のカウンターパンチをくらって郷子は赤くなり、隣の雄平を横目で見た。雄平は、しきりにまばたきをしている。

交渉は郷子にまかせる氣でいるらしい。

挙式予定は半年後の来年四月、ということに始まって引き出物の相談に至るまでもっぱら郷子がしゃべった。雄平が声を発したのは、「花束贈呈」に話が及んだときだ。

パッケージになった式次第の中に、両親への花束贈呈というのがある。郷子と雄平は口論になった。

「オレはいやだよ。そんな、こっぱずかしいものを受け取れるか！」

「みんな、やってることじゃないの！」

あのう……と受付の女性が二人のやりとり（会話）に割って入った。雄平に向かって、

「お宅さまは花束を受け取る必要はございませんのよ。お相手のご両親へ差し上げればよろしいんです」

「だから、くれてやるのはガマンするけど、自分がもらうのは願ひ下げだね!」

「だから、あなたはもらうほうではなく……」

にこやかな忍耐力で再び説明しようとする受付の女性の言葉を遮ったのは郷子だ。

「だって、父はもらうのとあげるのと両方の立場だから。花束も花嫁さんも」

「は!？」

話のボタンを、どうもかけ違えているようだった。

「あの……お二人が結婚なさるのでは?」

「そうです」

「ええ」

郷子と雄平は同時に答えた。

「花束を、——花嫁さんを、あげるのともらうのと両方の立場ってどういうこと!？」

思わず問いつめる口調になった受付の女性に、郷子は、

「だから、私という娘を父はお嫁に出すわけでしょ? で、自分もよそからお嫁さんをもらうんです」

廊下の緋毛氈をしずしずと踏んで、手を引かれた打ち掛け姿の花嫁が通り過ぎて行くのが見えた。

「言い忘れてましたけど」

と、郷子が言った。

「父、独身なんです。母が七年前に亡くなったので」

なぜか、受付の女性はため息をついた。

「あなた方、父娘おやこでいらっしゃるの？」

郷子と雄平はうなずいた。

「で、それぞれが同じ日、同じ式場で、同時にお式を？」

郷子と雄平はうなずいた。

「では、この用紙にご記入を」

体格に似合わない、ちんまりとした字を雄平は書いた。

林 雄平・四十九歳。……

書き終えると照れたように笑い、すると、いかつい顔立ちがどこか無邪気になった。

郷子のほうは今ふうの、まるっこいマンガ文字だ。

林 郷子・二十二歳。……

住所は二人とも同じ、都内目黒区柿かきの木坂三丁目だった。

「年を見りゃ分かるだろ年を！ だれが見たって父娘じゃないか」

式場からの帰り道、雄平がボヤいた。てれくささを思い出して身もだえしそうな父の様子に、

郷子は笑いをこらえて、

「そうでもないんじゃないかな。フリンの二人、とか」

「え？」

雄平は足を止めた。

「たとえばOLとその上司。オフィスラブが煮詰まったあげく上司は妻と離婚。若いOLのほうへ走った——とか」

バカヤロ、と笑いかけた雄平の表情がちよっとこわばった。

「おい、お郷。まさか——」

「なによ」

「きみの結婚相手。まさか、世間に顔向けのできない男じゃあ……」

ひ、とひきつりそうな声を郷子は上げた。

「やめてよねえ！ なに、何、言ってるの!？」

父の背中を思い切りたたき、

「……でも、こうやって寄り添ってたりなんかすると、人はどんなふうに見てるかわからないよね？」

びとっ、と声に出し、父の肩に頬を寄せるようにした。なじんだ気持の良いクッションだった。このクッションをだれが持ってくのかしら、とふいに郷子は思い、するとある感情が胸を走

った。

郷子も父の結婚相手がだれなのかを知らない。お互い、意地になっていた。半月ほど前の父娘げんかの果てが、今日の式場予約だった。勢いでそうなった。

発端：

都内の土地価格の高騰のさまを郷子も知らなかったわけではない。

しかし、その急騰ぶりが父娘げんかに火をつけて、それぞれの結婚話にまでエスカレートするとは予想できなかった。

事の始まりは、こうだ――

郷子の勤め先は都庁である。短大の家政科で食物栄養を専攻したが、努力して得た栄養士の資格は、今のところ父と祖父の健康管理にのみ役立っている。

都庁での郷子の仕事は総務局の局長づきの秘書であり、お茶くみ、電話来客の応対、局長に会議があるときは弁当の手配などする。

局長室自体が質素であり、郷子が与えられた机も灰色のスチール製でそっけないほどの代物だ。

出勤時の丸の内界限で、洗練された身なりのOLたちがそれぞれのオフィスへ華やかな波の

ようにひいていく。波のひいた後に残った地味なのが都庁の女子職員だ——という陰口がある。陰口をたたいているのがほかならぬ都庁の男子職員たちなので郷子はつむじを曲げる。

(自分たちは何なのよ)

しかし、結局、職場結婚が多い。

郷子の仕事は他に用のないときは、じっと座り続けての来客待ちだ。男性職員が雑談に現れることもある。年配の職員には郷子は愛想が良いが、若い職員にはわりとそっけない。

(私は職場結婚のパターンは踏みません)

そう、頑張っているわけだ。

同じ年ごろの女子職員との話題は、やはり結婚である。

「郷子ちゃんは、でも条件いいよお。家が柿の木坂でしょ」

「そうだけど。でも、なぜ？」

「私は一等地つきの花嫁候補です。そんなブランド首からぶら下げてるようなもんじゃないの」

財務局にいるその娘は、ごていねいに目黒区内の土地公示価格のコピーまで郷子にくれたのだった。

そのコピーに柿の木坂は載っていなかったが、隣接の八雲や東が丘がポイントとして示されていた。

八雲四丁目×の×	2、	1 2 0 千円／m ²
東が丘一丁目×の×	1、	7 5 0 千円／m ²

「郷子ちゃんとか、何坪？ これを基準に算定いたしますと……」

と、財務局の娘は電卓をたたいた。

「すごい。あなたの家って七億よ！」

あなたも暇ねえ、関係ないわよ、と笑っていた郷子が億という数字に目を見張った。

「ええっ、そんなに？ 家、古いのよ、ボロなのよ」

「だって計算だと。それにねえ、公示価格と実際の取り引き額って違うの。公示価格のまず二割は上乘せが期待できちゃうみたい」

「へえ……」

「きょんとんとした顔して。あなたって七億円の花嫁なのよ！」

ふとその時の話題を思い出したのが、父娘二人きりの夕食のときだった。

テーブルには、カロリー計算した料理が並べられているが、前立腺肥大ぜんりつせんを患ったことのある祖父のためのメニューは欠けている。

祖父の今朝けさは、愛用のバイクで東北方面へツーリングだ。年にふさわしくないが、バイクが趣味なのだ。息子である雄平は病氣だと言っているが。